小泉信三賞選評

期待したい若い人達の感性

権丈善一（けんじょうよしかず）
（慶應義塾大学商学部教授）

五つのテーマのうち、小泉信三賞は「文学は社会の役に立つか」、次席は「家族」、そして、三つの佳作は「家族」、「理系、文系」、「今の時代に『学問のすゝめ』を読む」からであった。

佳作から講評していこう。

テーマ「家族」を選んだ佐藤蘭美さんは、「家族と延命治療について」と題する論文をまとめている。祖父の死に動揺した筆者が、祖父が延命治療や蘇生処置はしないでほしいという希望を家族や病院に伝えていたと知り、延命治療、終末期医療について考えはじめる。他国の例も参考にしながら真摯に考察を進め、終末期医療に関して「家族のあり方が一層大切になるはずだ」という論に到達する。

宮下凜さんは、「現代日本における『市民』のあり方」を考えるきっかけとして、テーマ「理系、文系」を活かしている。文・理に分けることでより深く専門分野を学べるメリットがある一方、市民としては専門に特化しないジェネラリストが必要であり、総合的な視野を持って意欲的に学習することを怠ってはならないと説く。

早坂章さんは、「平成最後の高校生にとって『学問のすゝめ』は有用か」を考えている。「福澤が主張する様々な事柄には、その前提として公共に対する貢献、または日本という国に対する献身的な精神、愛国心が強力に働いている」ことを「新鮮」であるとし、自分は学校で目標や将来の夢を定めるよう言われるが、「世の中に貢献できるように勉強せよとか、公のために何か行動を促されることはほとんどない」。だが、「もう少し私たちの目が公共の貢献へと向けられなければ、福澤のような気概はなかなか起こらないのではないか。これはいわば、現代における「自己実現」の在り方の問題ではないか」と展開されていく文章を読み進めていると、平成最後の今の時代に、高校生に福澤の本を読んでもらうテーマを準備しておいてよかったと素直に思う。

次席に選ばれた鷲山拓見さんは、「『家族』を拓く」と題した論文を書いている。『東京物語』から『万引き家族』までの映画を題材として、時代とともに、悪しき方向、家族の劣化が進んでいるとみる。そして家族の原像を「心の拠り所」「伝えること」として、家族を創るために、血縁の家族だけではなく他者との関係につながる家族の在り方を考察していく。

小泉信三賞の稲垣早佑梨さんは、「『文学は社会の役に立つか』と問う社会を問う」――こうしたテーマが出されてきた時代背景を批判的に考察している。相模原の障害者施設で起きた殺傷事件などを筆頭に連想し、ああいう事件が起こる根底にある、「役に立つ」かどうかを強い価値基準にもつ現代の風潮を浮き上がらせ、筆者自身が読書家ゆえに展開できる縦横な論理で、そうした風潮を痛烈に批判していく。このテーマについては、他の高校生にも、「役に立つか」という問に反発する論文がいくつかあった。

様々な面で余裕を失い、役に立つかどうかで良し悪しを見る傾きを強めその方向に多くの仕組みを変えようとするこの国の大人達は、若い人達のこうした声に耳を傾ける余裕を持つべきなのだろう。